

グンヨー
後生の大垣さんから*

小菅丈治

大垣です。近況報告をどうも。網取や浦内の名前を聞くと、3回生で初めて西表に行ったときを思い出します。サバ崎と網取で潜りましたが、サンゴの生存率がよく、生命にあふれている感じでした。前に言ったかもしれませんが、網取は、東海大の研究所ができたばかりのころで、リーフの中で、1 m くらいの大きな魚（マグロ？）が二頭、体をぶつけ合っているのに出くわしたりしてびっくりしました。

ちょうど昨日、久しぶりに八重山で25年前に買った宮良康正の八重山民謡のテープを聞きました。以前にもお話ししたと思いますが、石垣滞在時にちょうど巡り合った、大浜安伴顕彰記念公演の舞台が彷彿としました。あれは舞台のライティングなども幻想的で、夢のようでした。最後に高齢の大浜老人が、羽織を着て舞台の中央に立ち、弟子たち一同と、次々に帰って行く観客をニコニコと見送っていた姿も印象的でした。あれらの歌の背後に、すさまじい愛憎劇や人間ドラマがありながらもすべて包み込んで、いまはただ舞台に穏やかな雰囲気醸し出される有様に感動しました。

これは言ったと思いますが、アンガマのころに宮古にフィールドに行き、だらだら汗を流しながら目的地までとぼとぼ歩きながらふと民家見やると、縁側から昼寝している人の足が出ている。それを見て「自己のあり方に対する深刻な疑問」にとらわれたのも、懐かしい思い出です。

やはり、八重山というのは独特の雰囲気のあるところだと再認識しています。言葉で表現しにくいですが、暗さと明るさが、ある種の温かみで包まれている、とでもいうか。

八重山に行った時には、紀州の生物相の「根っこ」を見ておこうという気持ちがありました。言われて気づきましたが、あの冊子（「浅海生物相の長期変動－紀州田辺湾の自然誌」）にも、「紀州と沖縄」という項目があってよかったですね。改訂版では考えてみたいと思います。

以前 Argonauta の Newsletter に、「自ら手を動かしてデータを取ることをやめた『研究者』の社会的発言は信用しない」と書いたことがありますが、生態屋はフィールドが命という感覚は今でも変わりません。ただ、番所崎調査は一人でやると4 km以上を「アヒル歩き」することになるため、ヒザと腰に負担がかかり、今年はちょっときびしい感じでした。自然を見る目が自然の中で養われるのは確かですが、私の場合は、シーズンとオフの区別が明確なため、シーズンに得たデータをオフに反芻しながら感覚を養っている感

じです。季節のはっきりしたヤマトと、季節感のうすい八重山の違いかもしれません。そちらはそちら流でとことんやってみるのもおもしろいのではないですか。

私の場合は、生活上の仕事が専門に近いと、もっとこうしたいのに、というような主張が出てきて妥協が難しい。全然関係のない、今のような仕事が合っていますが、これは人それぞれです。必要な金はあるくせくしなくても何とかなるというのは、その通りというのが実感です。

最近、また八重山に行きたいなあ、と思うようになりました。小菅さんが石垣に戻ったら、行く機会を作れば良いですが、松本さんや干川さんも懐かしいです。

この頃だんだん自分の気持ちに素直になってきたようです。

また気が向いたらベトナム便りなど、お届けください。

*後生（グショー）、八重山方言で「あの世」の意味

（こすげ たけはる・アジア熱帯養殖研究所）